

# 2002年 卒業研究要旨

## 子離れから考える女性の自立

市川 沙央梨

戦前と戦後では、女性のライフサイクルに大きな変化があった。戦前の女性は、末子が成人してからの自身の人生といってもあまり長くはなかった。しかし現代では、寿命の伸びと子ども数の減少により、子どもが成人してからの母親（女性）の人生は 30 年近く続き、女性が子育てから解放される「エンプティ・ネスト」という時期が現れた。今までになかったこの時期をどう過ごすか、どう生きるかということに注目が集まるようになった。

戦後から高度経済成長期にかけて、女性の多くは主婦になった。女性は家庭のことだけに集中することができ、子どもが生まれたら思う存分子どもに手をかけて育てることができた。しかし熱心な子育てをするあまり、子どもの世話を焼きすぎたり、子どもの心配をしすぎたりして、子離れできない女性がいることもまた確かであろう。

私は、母親が子離れできない理由の一つは、子ども以外の生きがいがないからであると考える。それは同時に女性が自立していないことを意味する。そこで、この論文では女性がどうすれば子離れできるのかということに着眼して、女性の自立について考察していくことにしたい。

第 1 章では、高度経済成長期にサラリーマンと結婚して主婦になった女性が、家族の中でどのような状況に置かれているかを考察した。その結果、女性は自分のことより夫や子どものことを優先させることを期待されているということ、結婚生活では再生産労働を最優先と考えていること、自分と企業戦士として働く夫を比べて漠然とした不安や不満があるということがわかった。また、男性サラリーマン（夫）は経済的自立はできているものの生活面での自立ができていないが、主婦はその逆であるということを指摘し、この「半人間」同士の結婚は互いに依存する男女関係であるということ述べた。

第 2 章では、家庭で子育てがどのように行われたか、子育て期の家庭で母親と子どもがどのような関係になっているのかを考察した。その結果、夫が仕事優先で家庭の運営も子どもの教育もすべて妻任せの家庭においては、母親は自分の価値を子育てにしか見出すことができず、子どもに依存する可能性があること、女性のライフサイクルの変化によってエンプティ・ネスト期が現れたが、子どもに依存する女性は子どもが巣から出て行かないように居心地のよい親子関係を作り出していることがわかった。そして、母親が子どもに依存せずに子離れするためには、子ども以外に自分の存在価値を認めてもらえるような何かを持ち、仕事や趣味や友人関係などの生きがいを持つことが必要ではないかという考察を行った。

第 3 章では、筆者が行ったインタビュー調査をもとに、女性の自立と子離れがどのように関連しているかについて分析・考察を行った。その結果、母親（女性）は子どもが自立

することに対して嬉しさと寂しさという相反する感情をもつが、寂しい思いをしないように子どもに依存する、すなわち子離れできない人もいる一方で、この葛藤を乗り越えた、乗り越えつつある人たちには共通して仕事や生きがい、夫とのよい関係性があることがわかった。

子育てから解放された後の母親の人生が長くなり、その期間を子どもに依存せずによのようにして生きるかということが課題となっている。そのためには、女性は子育ての最中でも夫や社会との関わりを強くし、自立した生き方をしなければならないのではないだろうか。